ししがたに

第629号　2024(令和6)年２月号
発行者：宗教法人「金光教鹿ケ谷教会」　TEL 075-761-2040
〒606-8425 京都市左京区鹿ケ谷西寺ノ前町 81
E-Mail　cosmos@inochinokoe.onamae.jp
http://www.inochinokoe.onamae.jp/inotinokoe/inotinokoe

今が今、「お頼りする心」で取り組む

二月を迎えました。皆さまどんな新年の一か月だったでしょうか。振り返ってみますと、様々な事が次々と起こってくる中でも、変わらずお繰り合わせを頂いて、支えて下さる周りの人のお世話になって、役目を果たさせて頂くことができました。このような「忙しい」「時間がない」という時、金光大神様の次のようなみ教えがあります。

「秋の忙しい時など、女にいたるまで足を汚しているので、ご飯を神様にあげなければと思い、大儀(面倒)がってあげるのでは、神は喜ばない。それよりも、釜の中で少しかき寄せて、神様と言って拝んで、それをよく混ぜていただけ。神はそれを喜ぶ」（理解Ⅱ河本虎太郎⑤）

「車屋さんの例えで話すとのう、客が急ぎの用があるから明日は早く人力車を回してくれと宵に頼みに来られても、その車屋さんが朝起きて、神様にお礼したり大祓いをあげたりしておっては、そのために暇が費えて、せっかくの一番仕事をはずしてしまうことがある。それでは神様にご無礼となる。そんな時は、顔を洗えばすぐ茶づけでもかきこんで、向こうで待つくらいに出て行け。そして、客を乗せてしまって、かじ棒を握ったら、それから、生神金光大神様、生神金光大神様と、走りながら神に礼を言え。客も喜び、仕事も間に合い、それで十分、神には届く」（理解Ⅱ近藤藤守㉛）

とても人間思いのあふれる、どこまでも人の助かりを願われる、天地金乃神様の広く深い御心を感じることができます。また、そのような御心を知って、神様に向かう私たちの姿勢を「氏子の方から難しくしないように」とも、み教え下さっています。

「信心は、みやすく(簡単に)せよ。百姓をしていて、灰や下肥(糞尿の肥料)を扱っている間に事が起こった時、手を洗ったり口をすすいだりしていては間に合わない。そうした時には、すぐそのままご拝して、お頼み申せばよい。信心は、はじめが大事である。かみしも(正装)を着たような信心をしだしたら、何もかも、かみしもを着たようにしなければおかげを受けられないようになる。それだから、ぼろで肥を担いでいるような信心をせよ。そうすれば、手を洗い口をすすがなくても、それでおかげは受けられる」（理解Ⅱ大喜田喜三郎④）

知らぬ間に身についた「こうしないと…」という基準が、時に自分にも人にも無理をさせてしまいます。どんな変化がある毎日も、全て丸々抱えて下さる神様ですから、今が今、お頼りする心でお繰り合わせを頂き、目の前の自分の役割にしっかり取り組ませて頂きましょう。

今後の予定

【2月】

４日(日)　**１０時半～**
月例祭・誕生感謝祭
初代愛助師例年祭

２４日(土)　**１４時～**
月例祭・月例霊祭

【3月】

３日(日)　**１１時～**
月例祭・誕生感謝祭

２０日(祝水)　**１４時～**
春季霊祭(真治大人三年祭)

・天地金乃神大祭
４月29日(祝月)14時～
・秋季霊祭　秋分の日付近
・生神金光大神大祭　10月下旬

✷ み教え実践 JISSEN ✷

～こころの練習帳より～

家族に「ありがとう」を言う

私たちがいちばんお世話になっているのは、身近な家族です。

それなのに、馴れ合いで感謝の言葉をおろそかにしていませんか。
「お風呂洗ってくれてありがとう」
「これおいしいね、ありがとう」

しあわせはそんな言葉の交わし合いから生まれます。今日は何回お礼を言えるでしょう。

今年は…

立教　165年

教祖神上がり　141年

教団独立　124年

鹿ケ谷教会開教　94年

を迎えます

前教会長を偲ぶ

【いのちが喜ぶ生き方を②】

～「開運のパワーポイント、正月編」より～

「いのちの声」に耳を傾けて

いのちのパワーアップ

戦後、急激に核家族化が進み、伝統的なしきたりを受け継ぐことが難しくなりました。個人を優先する社会では、価値観が多様化してばらばら状態となり「それぞれの勝手でしょ」という感じになっています。自分のしたいことをすることが、幸福に直結すると信じられてきています。今や正月の楽しみといえば、福袋が一位を占める勢いです。そんな中でも、なお多くの人々が初詣に出かけるところに、お店では手に入れることができない、神人関係の回復を願ういのちの動きがあると、私には思えるのです。近代化は、母なる大地を遠ざけた生活をもたらしました。もの作りが主役であった二十世紀とは異なって、情報が主役の二十一世紀では、スピードアップに歯止めがかからず、激しい消耗を強いられていのちの調子に狂いが生じ、心身の異常に苦しむ事態を招いています。正月こそはいのちの世界に心を寄せて自分本来の時間を取り戻す絶好のパワーポイントとして、遺憾なく頂き直していきたいと私は思うのです。

開運の秘訣

初詣で大方が願うことは、幸運に恵まれることと不運を逃れることに尽きるでしょう。そのためのご加護を神仏にお願い申すわけです。ところが、自分に願われている声を聞き受けることがないまま、一方通行のお願いで帰ってきてしまって開運につながらないところが、実に残念なのです。神仏、つまりいのちの親様は、いのちを時間という乗り物に乗せて、私たちを送り届けて下さっているのですから、そのことにまず「ありがとうございます」とお礼の心でお応えするのが、開運の秘訣、神様に「よっしゃ！」と受け取ってもらう為の作法なのです。

反対に、賜りもののいのちと時間をわがものとして、終始さらに欲望のままを求めたら、神様は先々をお見通しなので、持てば持つほど横領の罪が重なって、ついには不運に嘆くであろうと、ここは注意を要するところです。平等よりも自由、つまり欲望に拍車をかける競争社会によって、強者がさらなる自由を狙えば、弱者はその餌食にされて不自由が増します。あらゆる格差は広がる一方です。このような状況下で、いのちは「何が何でも平等でなくてはならない」と、抗議の声を挙げ続けているのです。このいのちの声の異議申し立てを大事なお役目の一つにしていかなくてはなりません。人は掘り出したばかりの原石と同じで、そのままでは本当の価値が見えないのです。自分の中に頂いたいのちが、可能性を花咲かせたいと願っています。周囲からどのように追い込まれても、自分に磨きをかけて下さるご親切として「ありがとう」と言えるところまで、ひたすらわが身に受け続けること。遠回りのように見えても、この受け身の練習こそが、楽をしたい欲望を抑えて開運につながる近道だと言えそうです。

私の開運体験

ふと気付いたら京都の大文字山のふもとが私の生活の場になっていました。幸いにも両親は、私と妹二人の三人を、わがものとするのでなくて、神様からの預かりものとして育てさせてもらおうと努めてくれていました。私は生まれつき足に障害があって、障害者として生きなくてはならないことに苦しみました。人並みでないものは生きる価値がないと思わせる世間の差別的な目が、私を苦しめたのだと今になって理解するのです。同時に、その目をはねかえして余りある、親の「いのちを大切にする生き方」のおかげで、私はつぶれずに生かされてきたことを有難く思います。私の親は、いのちが半人前ということはありえない。必ず一人前としてお役に立たせて下さるのだと可能性を信じて疑いませんでした。

自分を見るとき、欠けているところに目をつければ、限りなく意気消沈します。神様に、「どうぞ歩けるようにして下さい」とお願いするのが私の日課でした。そしておかげが頂けないことに苦悩しました。成人式を迎える頃に、もう既におかげを受けているという事実に気づきました。二十歳のいのちを賜っていること。そしてこのいのちをわがものとせず、神様のいのちとして良いようにお使い下さいと差し出すことができたのです。このような目覚めを経験してからは、「障害」にも新たな意味づけを手に入れました。隕石の衝突と同じで、私の身の上に避けがたい巡り合わせとして、それなしには誕生できなかった私であるということ。つまり誰かが引き受けることになっていて、それを神様がおまえに頼むと仰せになったのだとすると、誰か他の人に回して下さいと言い続けて一生を終われば、子か孫かに同じ病気を押し付けることにもなりかねないと思い至りました。それで私のところで引き受けて何とか私限りに留めて頂きたいとお願い申すことにしたのです。巡り合わせという考え方が、因果応報と異なるのは、責任の所在が個人ばかりでなくて人間全体にもあると考える点です。公害や戦争の犠牲者のことを個々の心がけの次元で考えることはできないのです。

いずれにしても天地全体のご都合で動いていく他ありません。しかしそのご都合の上にお繰り合わせを頂かなければ立ち行かなくなりますから、そこはしっかりお願い申していく必要があります。（続く）